日本赤十字社 千葉県支部
Japanese Red Cross Society
http://www.chiba.jrc.or.jp E-mail:info@chiba.jrc.or.jp

赤十字NOW 千葉

November 2012 Vol.24

発行所 / 日本赤十字社千葉県支部 〒260-8509 千葉市中央区千葉港5-7 TEL 043-241-7531 FAX 043-248-6812

身も張り裂けそうな別離

別れの乳房（日本赤十字社秋田県支部所蔵）
中澤弘光氏作
最愛の我が子に別離の授乳をする救護員の女性

日本赤十字社が総力を挙げて取り組んだ戦時救護活動では、多くの女性救護員が戦地に派遣されました。

救護員には、現役の看護婦（現在は看護師）のほか、退職して家庭の主婦として育児に専念していた方にも、日本赤十字社から応召がありました。

この絵画「別れの乳房」に描かれているように、人道的使命のもとに、乳呑み児や大切な家族との、身も張り裂けそうな別離がたくさんありました。

（3面に関連記事）

殉職救護員慰霊碑 和魂（にぎたま）

18人の御魂を慰霊

千葉県赤十字会館前にて、静かな空間と季節の花が囲みます

CONTENTS November.2012 vol.24

2 3 見開き特集
120年の感謝を込めて
○日本赤十字社千葉支部付属富浦海浜学校
○日本赤十字社の戦時救護活動

4 ○bay fm78
日本赤十字社presents
ヒューマニティー放送開始
○ご報告 義援金

5 イベントレポート
○千葉県赤十字
救急法フェスタ2012
○千葉県青少年赤十字のつどい

6 ○NEWS
㈱千葉銀行 創立70周年記念ご寄付
○お知らせ
発売予定の赤十字グッズ
（クロスバッグ）

おかげさまで120周年、そして新たな一
千葉県支部が行った特色ある人道的

日本赤十字社千葉県支部は、明治25年(西暦1892年)11月16日、日本赤十字社千葉県委員部として創立され、人道機関としての産声を上げました。

激動と変貌の120年、一組織がその間存続できたことは、ひとえにさまざまな各界のご理解と、たくさんの県民の皆様のご支援に支えられました賜物であると、職員及び関係者一同心から感謝しています。千葉県支部では、120年の間、人道機関としてさまざまな事業に取り組んでまいりましたが、本紙面では、他県に先駆けた特色ある千葉県支部の活動、激動を象徴する先の大戦における戦時救護活動を紹介いたします。

全国で初の小学校経営 保健分野の赤十字活動

日本赤十字社千葉支部付属富浦海浜学校

時は大正12年(西暦1923年)7月、日本赤十字社の事業に「平時健康の増進を図る」項目が付け加えられました。これを受けて、千葉支部では、同年10月に富浦海浜学校の開校を決めました。温暖な気候の内房の地富浦村。大房岬東方海岸線に沿った松林内に敷地を確保し、建設が進められ、大正14年1月8日、赤十字支部が経営する寄宿舎を持つ、全国で初めての虚弱体質の児童のための小学校が誕生しました。開校当時の児童数は48人、職員6人(校長、教師含む)という規模でした。

学校生活の様子

開校時から、尋常小学校、国民学校の課程に沿って運営がなされていました。

職員は、「児童の衛生に注意しながら、寝食を共に懇切に指導する」ことに傾注していました。昼間は本館で教科指導する女性教師は、放課後は寄宿舎の寮母として、入浴や食事を共にしながら、家庭的な触れ合いを行ったことから、親元を離れた児童達の心の拠り所となっていました。日課は季節に応じて設けられ、夏季は午前5時起床、午後8時就寝・消灯というように、規則正しいものでした。

学習活動

昼間の学習、朝夕のラジオ体操、清掃、洗面、食事、間食(おやつ)、静座など、規則正しい生活や学習活動が行われました。海浜の地の利を生かして、盛夏には海水浴等があり、衛生的配慮の行き届いた生活のために、健康回復に見るべき効果が現れたそうです。

規律と娯楽

毎週水曜日は、寄宿舎(寮)の自治会開催、土曜日には児童の室ごとの出演による、娯楽会等が開催されて、集団生活の規律と楽しさを味わうことができたそうです。

富浦海浜学校と和田正系(まさつぐ)氏

和田正系氏は、千葉医専(現千葉大学医学部)卒業後、助手勤務中の大正14年、海浜学校開校とともに校医として赴任しました。赴任当時25歳の若き青年医師は、児童達の身体面だけではなく、小さな魂の支柱となるべく、苦労と研究を重ね校医の任と向き合ってきました。その後、昭和14年には学校長を拝命、先の大戦中の困難な時期にもその任をまっとうし、学校の閉校まで勤務を続けました。

氏は心血を注いだ学校への断ちがたい愛着から、昭和53年の死去まで富浦の地に居住したそうです。富浦海浜学校の校歌も和田氏の作詞でした。

海浜学校校歌

一、波静かなる富浦の
多田良浜辺の松陰に
赤き十字の旗かへる
これぞ楽しきわが学舎

二、心と身をば鍛えんと
集ふ同胞いざ共に
赤き十字の旗のもと
皇御国の名をあげなむ

閉校と活躍の卒業生

富浦海浜学校は、先の大戦後間もない昭和24年閉校し、その後、千葉県に移管されて富浦学園となりました。

いまはない富浦海浜学校を巣立った卒業生は、戦争の惨禍や激動の世を経て、社会の指導者層としてご活躍した人も多いと言われています。同窓会も組織され、千葉市や東京で総会を開くなど、富浦時代を回想しながら、思い出を温めています。

和田　正系 氏

昭和8年頃の風景
左上/校舎全景
左下/海水浴の様子(多田良海岸)
右上/娯楽の1コマ(野外パーティー)
右下/ラジオ体操の様子

一歩のために
力活動、戦時救護活動を振り返ります。

日本赤十字社の戦時救護活動

日本赤十字社(以下「日赤」と表記)の戦時救護活動は、遠く第一次世界大戦(大正3年)にその歴史が始まりました。その後、満州事変(昭和6年)、上海事変(昭和7年)、日支事変(昭和12年)、昭和16年12月、真珠湾攻撃に始まった太平洋戦争と、昭和20年8月15日の終戦までの長い年月、国内外で日赤の戦時救護活動が続けられました。特に先の大戦では、日赤は総力を挙げて救護活動に携わり、その規模や犠牲の大きさは空前絶後のものとなりました。

この間、日赤から派遣された救護班は合計960班、救護員数33,156人にのぼりました。

千葉県支部では、救護班20個班、救護員447人を派遣しました。

派遣先・救護活動の実際

日赤救護班の行動範囲(派遣先)は、戦局の推移とともに、北満の極寒地から南太平洋のジャングル地帯に及びました。いたるところで、赤十字旗のもと傷病兵士や一般人(捕虜・現地住民含む)の救護活動にあたりました。

救護員は、戦闘と戦地の過酷な気候の中、食料事情の悪化を耐え、ひたすら傷病者の救護に精魂を傾けました。

その陰で結核や疫病に倒れ、あるいは極度の疲労で絶命する救護員もあり、ジュネーブ条約で守られるべき救護員自身も戦闘に巻きこまれるなど、多くの犠牲者が出たことも歴史上の事実となっています。

殉職した救護員

ジュネーブ条約によって、交戦中には攻撃されないはずの病院船、野戦病院が錯綜する情報の中、誤認され、思いがけない攻撃を受けることもありました。

不幸にも銃撃や病に倒れた救護員は、日赤全体で1,000人を超え、その尊い生命が失われました。千葉県支部から派遣された447人のうち18人が殉職しました。

殉職救護員慰霊碑　和魂(にぎたま)
18人の御魂を慰霊　静かな空間と季節の花が囲みます

はしけに揺られながら 後ろは病院船 高砂丸

シンガポール第68兵站病院内の様子

身も張り裂けそうな別離

千葉県支部救護員であった栗原静恵さんの手記「戦場に捧げた青春」からの一文を紹介させていただきます。救護員応召の時、「補充の6名のなかには家庭の主婦の身で応召した者が多く、なかには幼い女児をお姑さんに託し、あるいは離乳後間もない赤ちゃんを実家の母に預けてきた者、また小田原で助産婦開業のTさんは、ご主人と中学生の子を後に残して応召した方でした。」

栗原さんは、昭和11年4月以来富浦海浜学校に勤務されていました。栗原さん自身も、千葉県支部からの応召によって、海浜学校の児童達との悲しい別離を経験されています。

> 児童たちの中から突然武男君が「先生行ってしまうんですか」と問いかけた。すると私の手にしがみついていた和子ちゃんが「行かないで、行かないで」と体中をゆすぶりながらいう。急に目頭が熱くなって、和子ちゃんの頭をなでながら、吃るような声で「戦地へいって傷ついた兵隊さんたちをお世話してくるのですよ」といいきかせた。
>
> 武男君は「そんなら僕、淋しくなんかないや」といって笑顔を見せた。
>
> (戦時救護体験記録集「桐の華」から一部引用
> 日本赤十字社千葉県支部看護婦同窓会刊)

先人への慰霊と人道継承の誓い

先の大戦終結から約70年近くが過ぎようとしている今日。いまだ世界中では、戦禍の中にある国や地域があります。

2011年3月11日、東日本大震災という未曾有の災害が日本を直撃し、多くの尊い人命が失われるなど、甚大な被害をもたらしました。

今後も、日本赤十字社に寄せられる人道的支援の要請は、ますます増加することが予想されます。

2012年11月16日、創立120周年を迎える当支部では、人道的使命達成のために、青春を捧げた先人の御魂を日々慰霊し、更なる人道的使命遂行への誓いを新たにしてまいります。

特集の出典

人道・博愛−百年のあゆみ　平成5年3月 日本赤十字社千葉県支部発行
戦時救護体験記録集「桐の華」 平成4年8月 日本赤十字社千葉県支部
日本赤十字社千葉県支部看護婦同窓会

第25救護班全員帰還記念撮影　千葉県支部玄関(昭和14年5月)

bayfm78
LOVE OUR BAY LOVE OUR FUTURE

miracle!! miracle!!

日本赤十字社 presents
「HUMANITY ～ヒューマニティー～」

日本赤十字社千葉県支部 創立 120 周年を記念して、人気の bayfm で新しいラジオ番組コーナーが始まります。

赤十字の理念である人道に基づき、千葉県内で展開している千葉県支部の活動を様々な角度からピックアップ。

人と人のつながりにまつわるエピソードから、いざというときに役に立つ暮らしのヒント、医療活動や献血、さまざまな支援活動など、赤十字職員等へのインタビューも織り交ぜながら、元気なDJ ANNAさんがリスナーの皆さんの生活に役立つ情報をお届けします。

放送局　bayfm78 78.0MHz
毎週水曜日 11:30頃～（「miracle!!」内）
DJ:ANNA さん　anna@bayfm.co.jp

DJ:ANNA さん

ご報告と御礼
さまざまな義援金へのご協力ありがとうございました。

平成 24 年度、発生した集中豪雨等の自然災害に対する義援金について、千葉県支部での受付け分は、以下のとおりとなっております（9 月末時点）。

多くの皆さまから寄せられました義援金は、各県に設置された災害義援金配分委員会を通じて、被災された方々に届けられます。

皆さまの暖かいご支援・ご協力ありがとうございました。

○東日本大震災義援金（平成25年3月31日まで受付延長中）

18億869万1,072円（千葉県支部お預かり分）
3,210億8,316万5,745円
（日本赤十字社全体のお預かり分）

<以下、受付終了分>

○茨城県竜巻災害義援金	814,105円
○栃木県竜巻災害義援金	642,184円
○平成24年7月大分県大雨災害義援金	551,141円
○平成24年7月福岡県豪雨災害義援金	406,867円
○平成24年7月熊本広域水害義援金	451,176円

東日本大震災は、
小さな子ども達の心も
痛めました

震災直後から
たくさんの善意が
届けられました

赤十字救急法フェスタ2012

約1,400人が救命技術を競うメガ救急法コンテスト開催

さあ手当てだ!突発事故を想定したコンテスト

10月18日（木）、千葉県赤十字救急法フェスタ実行委員会（落合準子実行委員長）は、千葉県総合スポーツセンターを会場に、赤十字ボランティア（小・中学校児童・生徒含む）が救急法の技術を競う赤十字救急法フェスタ2012を開催しました。

同フェスタは、楽しみながら、救命・応急手当の知識と技術を高めていこうというもの。県内各地の赤十字地域奉仕団、特別奉仕団、青少年赤十字加盟校などから88チーム約1,400人（運営スタッフ含む）が参加し、5人1組で傷病者の手当をしていく三角巾を使った包帯リレーや、10人1組で事故想定に基づいて患者の応急手当・搬送を行うレースで、救急法の技術を競い合いました。

包帯リレーでは、「頭・肩・前腕・下腿」の手当の正確さとスピードが試され、優勝した君津市赤十字奉仕団秋元分団の鈴木由紀子分団長は「優勝をめざして頑張ったのでとても嬉しい。普段からのチームワークが活かされました」と汗を拭いました。

また、事故想定レースに参加した鎌ヶ谷第二中学校1年の波多野優希くんは「本番は練習より緊張したけれど、練習の成果は出し切りました。いざという時にも手当できそうです」と笑顔で語りました。

88チーム88通りの白熱した応援▶
会場は割れんばかり

◀大人顔負けの中学生チーム
傷病者も迫真の演技

防災をテーマに120人が集結！

千葉県青少年赤十字のつどいを開催しました

「お米はどのくらい?」初めての炊き出し体験

10月6日（土）、平成24年度「千葉県青少年赤十字のつどい」が開催され、会場となった千葉県赤十字会館には、青少年赤十字（JRC）活動に取り組む県内の小・中・高校の児童・生徒約70人を含む、約120人が大集合しました。

今年のテーマは、「防災」。未曾有の被害をもたらした東日本大震災の様々な教訓から、災害が起きた際に役立つ知識や技術、心構えを学ぶことをねらいとしました。

当日はまず、災害包装食の炊き出しを体験。その後は、小・中・高校生が混合のチームに分かれ、救援を待つ間に必要となる救急法（応急手当）の技術を学んだり、簡易浄水器などの作り方を見学。また、「避難所に視覚障がいの方がいる場合」を想定しての疑似体験も行い、障がいをもつ方々への支援や接し方を学びました。

学んだ救急法を発表する午後の部では、年下の児童に年上のメンバーが助言するなど、メンバーどうしで協力しあう姿が見られました。

また、日本赤十字社誕生ゆかりの地である佐賀・熊本に派遣された小学生メンバー、バングラデシュ国際交流派遣に参加した中・高校生メンバーからの報告・発表も行われ、参加者全員にとって新たな学びの一日となりました。

視覚障がい疑似体験
湯のみに指を入れ熱さを感じるまで少しずつお茶を注ぎます

泥水がろ過される様子をじっと観察◀
学んだ成果を披露
最後まであきらめずに▶

輸血医療を支え、ひとの未来を育みたい

株式会社 千葉銀行からの創立70周年記念寄付

10月9日（火）、(株)千葉銀行から、当支部の“生命と健康を守る”活動に協賛をいただき、移動採血車（献血バス）の車両相当額（内装機材含む）の寄付金目録（約4,000万円）が森田健作支部長に寄せられました。

これは、来春創立70周年を迎える同行の社会貢献活動のコンセプトである「ひと･環境･産業の未来を育む」の中で、ことに「ひとの未来を育む」と赤十字の人道的活動が合致したことによるものです。

目録贈呈式の冒頭、千葉銀行　佐久間英利頭取は、「皆さまのご支援で70周年を迎えることができます。皆さまのご支援にお応えするため、移動採血車を1台寄贈させていただきます。血液事業の更なる推進のため、是非有効にご活用いただければ幸いです。」と支援の経緯を語ってくださいました。

「70周年誠におめでとうございます。このたびは、移動採血車という大変高額なご支援をいただき、心から感謝しています。有効に使わせていただき、皆さまから“さすが赤十字だな”と言われるよう、人道的な活動に取り組んでまいります。」と、目録贈呈を受けた当支部長　森田健作千葉県知事は、謝意と人道事業推進への意気込みを語りました。

今秋、11月16日に創立120周年を迎える当支部では、千葉県赤十字血液センターとともに、献血受け入れ基盤を更に強化するため、移動採血車（献血バス）1台を購入し、年間延べ約240,000人の善意の献血を受入れる採血施設として、有効に活用し、更に安全な輸血用血液の安定的な確保に努めてまいります。

左)佐久間英利頭取　右)森田健作支部長　（県庁知事執務室）

お知らせ

予約受付中の赤十字新商品!

クロスバッグ

日本赤十字社医療センター 医師 丸山嘉一
国内医療救護部長 監修

名刺が入る
クリアーカバー付き

（11月中旬入荷予定）
緊急時、即座に持ちだしできるコンパクトな3WAYバッグに、赤十字マークをプリントした「クロスバッグ」。内容品は、緊急時に必要な物を厳選しセットしました。
さらに飲料や食料などを入れていただくスペースは十分にありますので、ご自身のご環境に合わせた物をセットし、いざという時のために備えてください。バッグのみの販売もいたしておりますので、様々な場面でご利用いただけます。

クロスバッグ
価格 4,980円（消費税込･送料別）
バッグのみ
価格 3,500円（消費税込･送料別）

■サイズ　H20cm×W40cm
■容　量　12.5ℓ
■素　材　エナメル
■内容品　ライト（手回し発電式）、ホイッスル、軍手、簡易寝袋、レインコート、さらし、巾着袋、携帯トイレ（1回分）、マスク（大3枚･小2枚）、タオル、あんしんカード（個人情報を記載）、非常持ち出し品チェックリスト
■付属品　ショルダーベルト、カラビナ

ご購入を希望される方は、直接㈱日赤サービスまでお申込みください。
（ご照会・ご注文は）㈱日赤サービス　Tel 03-3437-7514（商品担当）
http://www.nisseki-service.com/
または　日赤サービス　検索